

木霊の子

——ウィリアム・ブレイクへの賛辞

志田有峰

山に夜の焚火 野宮の家族囲む

あの子ただ一人 睡魔に襲われず

誰もいないが光る 木々の中の鬼火
目にして森に進む 通るは道なき道

土に濃く残った 謎の跡が導き

険しい上り坂 いつしか深き谷に

自分の名を叫び 返ってきた木霊

これにて終わる儀式 名は捧げられた

騒がしい麓 家族らが子の名呼び

疲れた足音 悲しき声の響き

聞き覚えは有り だがもう記憶の底
これで私と同じ この子も木霊の子